

一八八一年十二月十日(土)

ラジエンドラ邸における聖ラーマクリシュナ

ラーム、マノモハン、ケーシャブ・センたちと共に――

ターンタニヤのベチュ・チャトジエー通りにあるラジエンドラ・ミトラの家――。マノモハンの家で楽しい集いのあった日、ケーシャブ・セン氏がラジエンドラ氏に向かって、「あなたのお宅でも、このような機会が持てたらよろしいですね」と言った。ラジエンドラは心から喜んで、この日のために準備をしていた。

今日は土曜日、一八八一年十二月十日。ベンガル暦一二八八年オグロハヨン月の二十六日。今日、こうして祝宴を催せたことをとても喜んでいる。大勢の信者たちが来るだろう――ケーシャブはじめ、ブラフマ協会の会員たちも来るだろう。

そんな中、協会の仲間であるアゴルナートが亡くなったという知らせを、ウマナートがラジエンドラにもってきた。アゴルナートは二日前の十二月八日、ベンガル暦一二八八年オグロハヨン月、夜中の二時、ラクノウで亡くなった。その夜、電報でそのニュースが届いたので、ウマナートが翌日伝え

たのであった。ケーシャブはじめ協会員たちは喪に服しているの、土曜日にはきつと来られないのではないかとラジェンドラは案じていた。

ところがラームは、ラジェンドラにこう言った——「伯父さん、どうしてそんなことに気づかっているのですか？ ケーシャブ先生は来ても来なくてもいいではありませんか。タクルルはおいでになりますよ。御存知でしょう——タクルルは始終、サマーデイに入られて神を見ておられる御方なのですよ。あの御方がお喜びになれば、全世界が喜ぶのです」

ラーム、ラジェンドラ、ラージモハン、マノモハンは連れだって、ケーシャブに会いに行った。ケーシャブはこう言った——「おや、お宅に行かないなどと、私は申した覚えはありませんが……。大覚者先生パラマハンサがおいでになるのに私が行かない？ 必ず参りますよ。友人の喪に服していますので、食事は別のところでいたしますが——」

ケーシャブはラジェンドラたちと話している。ケーシャブの部屋には、聖ラーマクリシュナが入三昧の時の写真が飾ってあった。

ラジェンドラ「（ケーシャブに）大覚者先生パラマハンサのことを、多くの人がチャイタニヤの化身だと言っていますね」

ケーシャブ「（その入三昧の写真を指して）——このような三昧は、他に見ることはできません。イエス・キリスト、モハメッド、チャイタニヤといった方々が経験しました」

午後三時ごろ、聖ラーマクリシュナはマノモハンの家においてになり、そこで休息して飲み物など

を少々召し上がった。スレンドラは言った。「あなた様は写真機を見たいとおっしゃっていましたね。では、行きましよう」スレンドラはタクールを馬車にお乗せして、ベンガル写真館にご案内した。スタジオでは、どんなふうにして写真が写るかの説明をお聞きになり——ガラス面に硝酸銀を塗って、そこに映像をとらえるのである。

タクールの写真を撮ることになり——撮られている間に三昧にお入りになった。(訳註——この時撮影された写真を巻頭に掲載)

それからタクールは、ラジエンドラ・ミトラの家に行っちゃった。ラジエンドラは以前、行政副長官であった。

マヘンドラ・ゴースワミー氏が、中庭でバーガヴァタを朗読していた。大勢の信者たちが来ていたが、ケーシヤブはまだ到着しない。聖ラーマクリシュナは信者たちを相手にお話をなさる——

聖ラーマクリシュナ(「信者たちに向かつて)世間に暮らしては真理を悟ることが出来ない、と言われていたが、なぜだ? 出来ないことなんか無いが、とても難しいんだよ。今日、バグバザールの橋を渡ってきた——どんなに多くの棒や鎖で繋がれていることか。一本くらい外れたって、橋はどうにもなりやしない。まだまだ沢山の場所がしっかりつながれていて、それが支えているんだから——。それと同じで、世間の人たちは実に沢山のもので縛られている。至聖さまのお恵みをいただくことなく、その束縛を解く方法はない。

あの御方に会えば、もう心配ない。あの御方のマーヤーのなかには、明智と無明の二種類がある

が——見神の後は無執着になる。大覚者パラマハンサの境地になれば、そういうことを正しく理解することができる。乳に水が混じっていても、白鳥のように乳だけを摂とって水を除ける。白鳥にはそれができるが、コマ鳥にはできない」

一信者「では、世間に暮らしている人間は、どうすればよろしいのですか？」

聖ラーマクリシュナ「師グルの言葉を信じることに。師グルの言葉に従うことだ。師グルの言葉という柱にしっかりとつかまりながら世間の仕事をする事

りつかまりながら世間の仕事をする事。師グルをただの人間だと思つてはいけない。サッチダーナンダが師グルの姿で現れていらつしやるんだよ。グルのおかげで理想神イシュクタに会つたときは、グルは理想神イシュクタの中に溶け込んでしまふ。

真つ直ぐな信仰で出来ないことは何もない。グルの息子の食アプナ初め式プラーシヤナがあつたとき——弟子たちは資力に応じてそれぞれに出来る限りの食べ物を用意した。弟子のなかに一人、貧しい後家さんがいた。財産らしいものといえば牝牛めしが一匹だけ——。後家さんは壺にいっぱい乳をしぼって、それをグルのところへ持ってきた。ところがグルは内心で、この祝典に必要な牛乳と凝乳は全部、この女が引き受けるだろうと思つていたんだ。それが壺一ぱいだけしか持つてこないで腹を立てて、それをぶちまけてしまい、その上こう言つた——『貴様なんか、水に溺れて死んでしまえ！』女はグルの指示めいれだと思つて、河へ行つて身を投げようとした。その時、ナーラーヤナがお姿を現された。神さまは大それた女の気持ちをお喜びになりおっしゃつた——『このツボにも凝乳が入っている。いくら注いでも後から後から出てくるから、お前の先生も喜びなされるよ。さあ、このツボを持つていきなさい』このツ

ボを受け取ったグルは、驚いてモノも言えなかった。後家から話を聞くと、河のそばに連れていってこう言った——『私をナーラーヤナに会わせてくれなかったら、こんどは私が河に身を投げるぞ』ナーラーヤナは会って下すつたのだが、グルにはお姿が見えなかった。すると後家は言った——『神さま、もし、私の先生にお姿を見せて下さらなくて先生が身投げしてお亡くなりになったら、私もいつしよに肉体からだを捨てます』するとどうだい、ナーラーヤナは一度だけ、グルにお姿を見せて下すつた。

「ごらん、グルを信じきっていたから自分も神さまに会えたし、そのうえ、グルまで神さまに会えた。」

だから、こんな歌がある——

たとえ私のグルが酒屋に通っていても

（それでも、わたしのグルはニティヤーナンダ（常に至福に満ちた御方））

だが、皆がグルになりたがって、弟子になりたいという人はごく僅わずかかだね。雨の水は高い場所には溜たまらないよ。低い場所に——凹くぼんだ場所に溜まる。

グルからいただいた（神の）名前を信じて、その名をしっかりとつかんで修行することだ。

真珠貝の中に真珠ができる——貝はスワティー星座から降る雨を待ちかまえている。その雨をうけると真つ直ぐに底知れぬ海に沈んで行き、真珠ができるまでジーツとしてゐる」

聖ラーマクリシュナ、ラジェンドラの家にて

大勢のブラフマ協会員が来ているのをご覧になったタクールはおっしゃった——

「この協会の集まりは、真に求めているものなのか、ただ形だけのものなのか？ ブラフマ協会では定期的に礼拝会を催すが、そりやとても良いことだ。でも、祈りというものは、深く心の底からのものでなけりゃね。ただ形だけの礼拝や講演だけじゃだめだ。俗世の欲がなくなるように、神の蓮華の御足に清い信仰が持てるようにと、心の底からあの御方にお祈りしなけりゃいけない。」

象は口から外に出た牙も持っているし、口の中にも歯を持っている。外の牙は見るからに立派ではれぼれるようだが、ものを噛んで食べるのは外からは見えない奥の歯だ。それと同じで、心の中では女と金を楽しんでいるようなら、信仰をどんどん傷付けていく。

外で講演やなんかして何になる？ ハゲタカは高く舞い上がるが、目はいつも墓穴を見ている。ロケット花火を飛ばすと初めのうちは空高く舞っているが、次の瞬間には地面に落ちてしまう。

快樂への執着を捨てたら、肉体から出て行くときには神のことばかり思うだろうよ。そうしなければ、この世の物事にだけ心を引かれるだろうさ——女房のこと、息子のこと、家のこと、財産や名譽のことなんかね。オウムや九官鳥を仕込めば、鳥でも ッラーダー・クリシュナ^ナなんて神の名をさえずることができる。でも、ネコに捕まったときは、ギキヤアー、キヤアー^グと本音で鳴く。

だから、いつも心掛けて訓練すること（アヴィヤース）が必要なんだよ。あの御方の名を讃え、歌い、

またあの御方を瞑想し、思いを凝らして、そして祈ること——快樂への執着が消えますように、あなたの御足に心が行きますように、とね。

こういう人は世間に住んでいても女中のような気持ちで暮らしている。与えられた仕事は何でもきちんとやるが、心はいつも郷里かたきとを想っている。つまり、神のところを置きつ放しにしながら世の中の仕事をしているんだ。世間で暮らしていれば、どうしても汚れは体につく。正しい信仰を持った人は、世間では泥魚のようなものだ。泥の中に暮らしていても、体に泥がついていない。

ブラフマンとシャクテイは不異おなじだ。あの御方を、クマーグクマーグとって呼びかけると、じきに神への信仰バクテイと愛が生まれる」

こうおっしゃって、聖ラーマクリシュナは歌をおうたいになった——

シャーマのみ足もと大空高く

わたしの心の風たかは天翔けていた

よこしまな風をまともにうけて

急にかたむいて落ちてしまった

.....

一八八三年三月十一日に全訳あり

次の歌

ヤシヨーダーにクリシュナは、青い玉ニールマニと呼ばれて

やさしく踊ってみせたもの――

あの美しい姿をどこに蔽かして

このカーリーのすさまじきおん顔

………

一八八四年十月四日に全訳あり

タクールは立ち上がって、踊りながら歌っておられた。信者たちも立ち上がっていた。

聖ラーマクリシュナが時々三昧に入られる御姿を一同は凝視していた。絵のように皆、身動きもせず立っていた。

医者サマドヤのドゥカリ先生が、三昧がどのような生理状態によって起こるのか調べようと思つたらしく、タクールの目の指を突っ込んだ。それを見て信者たちは、非常に腹を立てた。

このようにして素晴らしいキールタンと踊りが終わると、一同は席について坐つた。このときケーシャブ・センが数人の会員を伴つて到着し、タクールにごあいさつ申し上げてから席についた。

ラジェンドラ「(ケーシャブに向かつて)今、すばらしい歌と踊りを見せていただいたところですよ。こう言つて彼は、トライローキヤに、また歌をうたつてくれるようにと頼んだ。

ケーシャブ「(ラジェンドラに)大覚者先生パラマハンサが坐つていらつしやるときにキールタンをしても、ど

うかと思いますが……」

でも、歌が始まった。トライローキヤと会員たちが歌った――

心をひとつにハリ、ハリ、ハリ、ハリ、と

ハリの名呼びつつ世の海渡れ

ハリは水に、ハリは地に

ハリは太陽、ハリは月

ハリは火のなか 大気のなかに

ハリで充ち満つ この宇宙

聖ラーマクリシユナと信者一同に食べ物を供養する用意が二階の部屋にできていた。タクールはまだ中庭に坐つて、ケーシャブと話をしていらっしゃる。ラーダーバザールでの、写真を撮ったり見たりした話である。

聖ラーマクリシユナ「笑いながらケーシャブに）今日は、写真を撮る機械を見てきて面白かったよ。ただのガラスには写真は写らないんだね。そのことを一つ勉強したよ。ガラス板に黒いインキのようなものを塗っておくと、写真が写るんだ。あれと同じ理屈で、神様の話をただ聞くだけでは何にもならない。すぐ忘れてしまう。でも心の中が真理かみを慕う情熱――これが黒インキにあたるんだだけ

ど——この恋慕の気持ちで色づいていれば、神の話をしっかりとつかむことができる。この黒インキがなけりや、すぐ忘れてしまふさ」

やがて、タクールは二階に上がられた。タクールのお席には美しいカーペットが敷かれてあつた。

マノモハンの母上であるシャーマスンダリー・デーヴィーがお給仕をしている。マノモハンは言っていた——「私のやさしい母がシャスタンガの礼ブラチームをして、タクールに食べ物の供養をうけていたのだのです」ラームたちも列席していた。(訳註、シャスタンガの礼——体の八つの箇所＝頭、目、口、胸、へそ、手、膝、足を地につける礼拝。つまり、全身を投げだしてする最高の礼拝)

タクールが召し上がっておられる部屋の向かい側にある広間で、ケーシャプをはじめとする信者一同が食卓についていた。

その日、ベチュ・チャトジェー通りに祀られているシャーマスンダル神像に仕えているシユリー・シャイラージャ・チャラン・ムクジェーが列席していた。